

氏名	小林 沙 智		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲博制第 49 号		
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 22 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当(課程博士)		
学位論文題目	創作舞踊『Kiyohime』へのアプローチ —東西古典舞踊にみる女性の身体表現の比較研究		
作品テーマ	『東西古典舞踊にみる女性の身体表現の比較研究』に基づく作品創作		
論文題目	創作舞踊『Kiyohime』へのアプローチ —東西古典舞踊にみる女性の身体表現の比較研究		
論文審査委員	主査 教授	山 本 健 翔	
	副査 名誉教授	井 関 和 代	
	副査 客員教授	新 田 三 郎	
	副査 非常勤講師	倉 岡 智 一	

内容の要旨

申請者・小林は、幼少期から日本舞踊とバレエを同時進行で習得し、「幼い頃から何の不思議もなく<日本舞踊>と<バレエ>を踊り分けていた」が、長じるに従って「周囲の人たちから両者の相違性或共通性」を問われるようになり、自身でも「日本と西洋における古典舞踊の在り方について意識する」ようになったという。そして本学に進み、学部の卒業制作作品や博士課程前期課程修了作品のテーマとして、一貫して東西古典舞踊の相違性を追う舞踊表現に挑んできた。しかしながら、その表現は、両者の融合的表現にとどまり、両者の表面上の相違性或共通性を理解できたものの、それらの根底に潜む相違・共通性を見出すことができなかった。

そこで、博士後期課程に進み、『東西古典舞踊にみる女性の身体表現』を課題に、その比較研究を行うことにした。そして、これまでの両舞踊の研究は、それらの分野の研究者によってなさ

れているが、両者を比較研究した報告は少ないことを知った。そして実演者の立場から、日本舞踊の〈女踊り〉とバレエの〈バレリーヌ〉の表現、つまり、「女性を表現する舞踊」の比較研究を行い、その成果を学位申請への創作舞踊『Kiyohime』へのアプローチとすることを図った。その研究成果となる本論文は6章からなる。

概要はまず、序となる「はじめに」では、上記したように申請者が本研究に至る経緯と、本論文で使用する参考文献の内容の記述を行い、「第1章」では、東西古典舞踊の〈女踊り〉の誕生から今日までの歴史的経緯の概要を紹介した。「第2章」では、東西舞踊の歴史的・文化的背景を踏まえて、各々の舞踊表現の基本的動作である「立つ」「歩く」「座る」と、「手先」の表現を紹介して、それら技法の比較を行った。その際の題材として『京鹿子娘道成寺』と『ラ・シルフィード』を用いた。それらの比較から息づかい、しぐさに表れるような、内に向う、地を意識する日本舞踊、外に開く、天を志向するバレエといった相違とともに、日本では〈丹田〉、フランスでは〈sacre(仙骨)〉と呼び名に違いがあるものの、舞踊中に意識する体軸の支点が同じ箇所であることを明らかにした。「第3章」では、現在に伝承される『京鹿子娘道成寺』のうち、初演当時の振付を今日に伝えている「志賀山流」と、一般的に知られている「中村流」の振付や構成、表現方法の比較を行い、舞踊創作『Kiyohime』への手がかりを探った。「第4章」では、第2章で得た比較資料と前章の『京鹿子娘道成寺』の比較資料を基にして、舞踊創作『Kiyohime』の表現について論じ、その創作意図や作品内容、演出方法、そして使用音楽や衣装についても記述した。終章となる「結びにかえて」では、申請者の創作舞踊『Kiyohime』の実表現を通して得た共通する「二つのしぐさ」について、その分析を行い東西古典舞踊にみる女性の身体表現の根底にある「かたち」について報告を行った。

(94 図、93 頁、79,872 字)

審査結果の報告

申請者・小林は、幼い時から、日本舞踊の「お稽古場」、バレエの「お教室」で、それぞれの舞踊に親しんできた。きれいな「お衣裳」をつけて、「(発表)会」で踊ることが、「大好き」だった。そして、踊るときには何かが「おりてくる」などということをお口にするような、いわば直

感と経験だけで、舞踊に関わってくるなかで、ことに日本舞踊では、東京新聞が都新聞という名前で、芝居、花柳界と結びつきの深かった頃から開催されてきた、由緒ある全国舞踊コンクールで、二度にわたって二位、日本舞踊協会賞も二度受賞という実績も上げてきたのである。その彼女が、東西舞踊の女性の身体表現の比較研究を行なうという。但し、自身の切実な踊り手としての、問題意識が動機になっているのではなく、大学で出会った、バレエを幼少時から体得してきた仲間たちの、日本舞踊に出会ったときの戸惑いを見聞きし、自身の「当たり前」を、解明してみようというのがきっかけ、勿論その両者を身につけた新たな舞踊表現を模索するという意欲もあるのではあるが、そういった研究に臨む姿勢が、新田、倉岡両副査がまず指摘した、本論文の総花的印象に繋がっていることは否めない。

しかし、研究に取り組むにあたって、前期課程の舞台領域から、後期課程では芸術文化学研究分野芸術学に進学して井関副査に師事、その後あらためて、芸術制作研究分野に転じ、舞台領域に戻り、作品創作、論文執筆を行なったという過程を考慮するならば、このような内容も、申請者の研究にとっては必須だったとも言えよう。井関副査はこう記す。

「舞踊に限らず《伝統的技術》の伝承の多くは、申請者が文献資料に挙げた世阿弥の『花伝書』にあるように《これ、筆に見え難。相対しての口傳なり》と、詳細な動作・作業の文章化はこれまででなされずにあった。また、元禄期に歌舞伎の女形・芳澤あやめが著した『あやめ草』には《(現代訳)稽古に精を出さなければ、花が実を結ばないと同じである。(中略)稽古をたしかにして、花をあしらえ》ともある。申請者の挑んだ《技・藝》の世界では、その修得はひたすらに修練を重ねることを必要とされている。そのために多くの資料は、このような《心根》を解くものである。

そして、文献探しから始まった申請者の本研究の取り組みは、舞踊家の世界では《言わずもがな》とされてきたものである。しかしながら、自身の中に湧き上がってくる疑問に対して、自らに答えるように東西舞踊の歴史的文化的背景を探り、表現技法の比較を行い、それらの資料を手がかりにして舞踊『Kiyohime』を創作した。そして、東西の女性舞踊にもとめられる《二つのしぐさ》に気づくことになる。つまり、体軀から生み出す《交差》と《弧》の軌跡が、東西舞踊に共通した表現であることを導き出した。その結びは、各造形芸術において、語彙に相違はあるものの造形表現時に共通した《体軸と呼吸、間》の姿勢に繋がるものである。本論文の評価すべき

点は、これまで著されることのなかった舞踊表現を、実演者の立場から記述したことにある。」と。その結果、創作作品『Kiyohime』も、論文との整合性が明確なものになったことは、評価に値する。

この作品に至るまでも、紆余曲折があり、当初は、西洋舞踊を専門とするブラジル人のダンサーを相手役に、群舞には、ハウス、ヒップホップを得意とするダンサーと、俳優を配したもので、試みとしては意欲的ではあったものの、作品世界を構築するまでには至らなかった。そこで、「京鹿子娘道成寺」の手法に立脚して、一人の踊り手が様々な女性の姿態を踊る中に、西洋舞踊の手法を取り入れ、「娘道成寺」では、希薄になっている、元となった「安珍・清姫伝説」を改めて活かした作品とした。つまり清姫ゆかりの寺を訪れた、申請者自身である「私」に、清姫の思いがのりうつり、恋する女性の様々な姿を、描き出す。たとえば、天にも昇らん恋の喜びは、上昇志向のバレエで表し、かなわぬ思いの「ふつつつとした恨み」では重心低く、日本舞踊の振りで見せ、さらに両者を超えたかたちで、鐘を象徴する舞台美術を、蛇に化身した女に見立てた踊りの末に、その霊を鎮め、昇華させて、「私」自身もあらたな、一步を踏み出す。結果、研究と創作を自らの姿に重ね合わせたものとなり、作品としても充実した。

ことに日本舞踊の「くどき」といわれる場面では、本来の長唄は使用せず、その歌の文言を、屏風を思わせる舞台セットに投影し、その中で踊ったことも、曲に合わせる西洋舞踊と、歌詞にあわせる日本舞踊の特性に対しての実験的試みとして興味深いものとなった。

新田、倉岡副査は、この舞台成果を評価しつつも、新田副査は、バレエ表現の甘さについての不満を上げ、さらに論文における結びの記述が、その研究を反映したものになりきれしていないとし、倉岡副査は、作品を支えた緊張感と、和洋の表現方法の違いが盛り込まれていた点は評価するも、丹田、仙骨という意識の要から生ずるであろう、視線、目の表現の不足を惜しみ、論文における歴史認識の甘さも指摘した。

同様、井関副査も、「東西舞踊の相違性を探ることを重視するあまりに、その際立つ事例を追い、＜主題＞となる舞踊表現の分析へと繋がる論述が少なく、構成についても、今少しの精緻さが望まれる。また、各章に重複する論述が混在して、申請者の論旨の展開を妨げる箇所が幾つか見受けられる。そのため、本研究の位置づけを曖昧にしている感が否めない。」と記しつつも、

「これらの欠点はあくまで本論文の完成度を高めるための苦言といったものであり、本論文の意義を減じるものではない。そして、申請者の本研究への問題意識<両者の舞踊表現の根底に潜む相違・共通性>を明らかにしていく内容は、博士の学位の授与に値すると判断される。」とし、それは新田、倉岡両副査の見解とも一致した。

以上、いくつかの欠点はあるものの、「ただ踊ることが好きな女子」であった申請者が、この大学院での学びを通して、実演者ならではの論考と、それを反照した作品創作を可能にした点を評価し、本論文を大阪芸術大学大学院芸術制作研究分野の学位(博士)申請論文に値するものとして認定する。